

「白石さん、またデスクでお昼ですか？」

「ああ……ちょっと資料で気になるところがあって」

「ほんと細かいですね～、でも白石さんに見てもらうと、先方に出す時安心です！」

そんなことないよ、と苦笑いをして後輩から資料を受け取った。確認は紙で、とお願いしている自分のデスクは資料が積み上がっている。自分のこだわりだから仕方ないが、物理的な圧迫感にこめかみ辺りが痛んだ。誤魔化すように栄養バーをかじる。

社会人として7年も経つと、自分の仕事スタイルというものも確立してくるもので。到底器用とは言えない自分は、時間と労力を掛けないといけないことがよく分かった。誰よりも早く出社して、誰よりも残業して帰る。これが日課となっていた。

「おい黒瀬！お前今月調子いいな」

「あざっす！いやあ、夏だからっすかね」

「なんだそれ」

オフィスが明るくなるような、快活なよく通る声が響く。視線を上げると同僚の黒瀬が課長に褒められていた。俺とは正反対の、器用で愛想がいい営業マン。

「これなら白石抜くんじゃないか？」

「でも、白石強いからな～」

ちらりとこちらを見た黒瀬と目が合う。なんだ、何て言えばいいんだよそれ。

黒瀬とは新卒からの同期で、上司はなにかと比べて競わせたがる。それでなんとなくお互いにライバル意識が芽生えてしまっていた。まあ、1位取れたほうが嬉しいし。

「……追い抜かれないように頑張ります」

「わー、余裕なのムカつくわ〜」

負けず嫌いはお前だけじゃないんだぞ、と俺は笑って仕事に戻った。あ、さっきの資料に計算ミスある。もうひと頑張り、とブラックコーヒーを流し込んだ。

「もうこんな時間か……」

気づけば定時を大幅に過ぎていて、オフィスは薄暗く静かだった。小腹を満たすためにチョコレートを口に放り込んでキーボードを叩く。うーん、やっぱりこの資料だと、あの客先には突っ込まれるよなあ。逆に数字詰めれたらいい反応くれるし、もうちょい……。

「お前、まだ帰ってねえの？」

「うっわ、びっくりした……黒瀬こそ珍しいじゃん」

「この時間じゃないと打ち合わせできないって、先方が」

「ふーん……」

音もなくオフィスに戻ってきていたらしい。要領のいい黒瀬が遅くまで残業していることは少なかった。取引先や上司と飲みに行ってるイメージがあったけど、どうやら今日は仕方なかったらしい。

「今何件抱えてんの？」

「え？あー、メインは5件だけど、後輩のもいくつか」

「はあ？並行で？お前……やりすぎだろ」

「俺がやった方が、全体見たら早いんだよ」

「嫌味ったらし〜」

うるせえ、と返してまた画面に向かう。もちろん、後輩の負担にならないくらいで修正は返してるし、後輩にも経験を積んで欲しい。でもこの激務の中でタイパを考えると、俺がやる方が早いんだから仕方ないだろ。

「ふーん？まあ、お先。無理すんなよ」

「お疲れ」

黒瀬が帰ってぐっと伸びをする。バキバキと肩や腰が鳴って思わず眉をしかめた。

黒瀬は器用だ。俺みたいに机に資料を積まなくても、客先の顔色を見て、必要な資料を適切に選んで成功していく。

だから、あいつにだけは負けたくなかった。あいつに負けたら、俺のこの無駄な努力まで否定される気がした。

「……流石に今日は手伝ってって言えばよかったかな」

最近終電間近で帰ることも多く、ろくに寝れていない。部屋だって散らかってて身体も休まらないし、そろそろワイシャツをクリーニングに出さないと予備も無くなる。でも……休みの日外に出るのダルいんだよなあ。

自分でも仕事を抱え込みすぎてる自覚はある。けどこれくらいしなきゃ、営業トップを維持できない。やれば成果になるんだったら、やる選択肢しかないだろ。そしてまた、終電で家に帰るのだった。

「まだ帰んないの？」

「え？ああ、まあ」

次の週、また黒瀬が残業中に声を掛けてきた。てか、それこっちのセリフなんだけど。

「そっちこそ。あの黒瀬がまた残業？」

「そういう日だってあるんだよ」

「こっちもそういう日なんだよ」

「ああ言えばこう言う。毎日のくせに」

わざとらしくため息をついた黒瀬がオフィスを出ていく。相変わらずピシッと決まったスーツ姿。あまり背が高くない俺からしたら羨ましい。営業において見た目も重要で、清潔感や仕事できそうな雰囲気は契約成立を大きく左右する。

そろそろ散髪もしないと。スーツもくたびれてきたから新調したいけど、今は忙しすぎて管理できないか。ていうかまず食生活からだ、もう碌にちゃんとした飯を食べてない。栄養食という言葉信じて、仕事をしながら口に運んだものは味を全然覚えていなかった。

「おーい、白石」

「うわっ！？おま、帰ったんじゃないのかよ」

「お先って言ってないだろ？」

「言ってないけど」

「てかビビリすぎな？結構ホラーとか苦手？」

「まあ見ないかな」

「やっぱビビってんだ」

なんなんだ一体。じとりと笑う黒瀬を見やれば、ビニール袋を掲げてくる。いたずらっ子のような笑顔に俺は首を傾げた。

「なんだよ」

「晩飯」

「……当てつけ？」

「なんでだよ！白石のだよ」

「え？なんで」

黒瀬がビニール袋から、おにぎりやスープ、ホットスナックの唐揚げを出していく。黒瀬のデスクに並べていくのを不思議に見ていれば、ムツとした黒瀬が振り返った。

「お前、今日昼飯も食べてないだろ」

「そう言えばそうかも」

「ほらあ！だからこれ、食べ」

「いやいいよ、黒瀬が食べよ」

「なんでだよ！倒れたらチームに迷惑かかるだろ。それに俺、梅干し得意じゃないし」

ふと見ればおにぎりのパッケージには梅干し。断られることを考えてないところが黒瀬らしいというか、なんというか。

「……このためにわざわざ戻ってきたんか？」

「も一、いらぬなら持って帰るからな」

「全然いいけど」

ぐう～～～～。

良くも悪くも絶妙なタイミングで俺の腹が鳴る。腹を押さえても止まるわけじゃなく、黒瀬がにやーっと笑うには十分な音だった。

「身体は正直だな？ほら、こっち座って食えよ」

「いやでも」

「じゃあその紙が多いデスクで、スープをひっくり返さない自信あるんだな？」

「……いただきます」

黒瀬の席に座って手を合わせる。わざわざスープを温めてきてくれたらしく、温かさがじんわりと広がっていく。くたくたになった野菜を口に運べば久しぶりのビタミンに身体が喜んでいる気がした。

「うまい？」

「うまい。梅干しもうまいぞ絶対」

「いらねー」

はは、と笑って黒瀬は荷物をまとめだした。上司や客先にも向けるのは違う、無邪気な笑顔。いつもそうやって笑えばいいのに、なんてお節介を言う筋合いは無かった。

「じゃ、お先に。早く帰れよ」

「あ、ちょ、飯代」

「いらねーよ、それくらい」

そう言ってオフィスを後にする背中をぼんやり見送った。パリ、と齧った梅干しおにぎりは酸っぱくて目が冴える。やっぱり今のは、夢でも幻でもなかったらしい。

思い返せば、黒瀬はメンバー管理が上手い。後輩へ仕事を任せたり、上司のサポートに入ったり、そういった人員リソースの調整が上手いのも、要領の良さに繋がるんだろう。そうやって上手く回っている要因のひとつに、こういった世話焼きなところがあるんだろうな。

羨ましいけど、俺の得意分野ではない。まだ温かい唐揚げを頬張って、一つ深く息を吐いた。

ピピピ、ピピピ……。

スマホのアラームを止めて、重たい身体を起こす。今日は雨か？頭が痛い。午前は打ち合わせと資料作成、午後は大きい案件の会議……。自分のコンディションは関係ない、目の前のタスクを今できる最大出力でこなすだけ。

なんとか洗面所で顔を洗って鏡を見れば、顔色の悪い隈が濃い自分が映った。酷い、こんなやつに仕事を任せたくない。少しずつ覚えた薄いメイクで顔色を誤魔化すようになったのは、いつからだっただろう。なんとか見れる顔にして、髪もセットしてやっと外に出れる顔になった。

「ワイシャツ……これまだ着てないよな。スーツはこれで……」

脱いだワイシャツやスーツが散乱する床をかき分けて、カバンを手に取り玄関へ向かう。靴に汚れも、なし。今日もちゃんとできてる。電車に乗る前にコンビニでいつものブラックコーヒーと栄養食を手にとった。

「……梅干し」

ふと目に入った梅干しのおにぎりを横目に、セルフレジへと足を進めた。

「お前、結局それかよ」

昼休憩でオフィスが静かになったところに、黒瀬は不機嫌そうに言うてくる。齧った栄養バーを咀嚼して頷けば、より眉間に皺が寄った。おいおい、愛想のよさはどこいったんだよ。

「なに、そんな見るなよ」

「見えるところで食うな、そんなの」

「そんなのってなんだよ。結構腹持ちいいんだぞ」

「体調管理くらいちゃんとしろよ」

「やってるって……」

小言から逃げようと席を立つと、目の前が歪んで少しふらついた。デスクに手を付くと、慌てたように黒瀬が背中を擦ってくれる。

「おい、大丈夫かよ」

「大丈夫、ちょっとふらついただけだろ」

「ほんとかよ」

「若干寝不足なだけ。今日は……いつもより早く帰るよ」

しれっと黒瀬の手を避けてトイレへ向かった。鏡にはきちんと隈が隠れた、少し疲れた顔。

自分でも普段と変わらないように見えるのに、なんであんなに心配してくるんだ？世話焼きモード入ってんのか？ぼんやりとした照明の下では、自分の顔色がよく分からなかった。

黒瀬の世話焼きモードは1週間経っても続いていた。事あるごとに体調を気にしてきて、残業していたら晩飯を差し入れてくれる。悪いから、と断っても梅干しを理由にいつも押し切られた。別の物買えばいいのに、とは言えない。

「おい、今日は何時まで残るつもりだよ」

今日もまた、退勤時間を聞かれる。俺はもう画面から目を離さず返事するようにになっていた。

「金曜日なんだから、俺に構わず飲みにも行ってこいよ」

「白石が早く退勤したらすぐ行くよ」

なんでだよ、関係ないだろ。とは思いながら、そんな反論するのも時間が惜しい。今週のノルマを達成していないんだこっちは。要領のいいお前と違って。

黒瀬みたいに、笑って周りを巻き込めたらよかった。でも俺にはそれができない。だから、手を動かすしかない。

「ってか、なんでそんな自分でタスク抱え込むわけ？」

「俺が最終確認したほうが結果的に早いから」

「今はそうかもしれないけどさ～」

勝手に隣の席に座り、頬杖をついてこちらを見てくる。ニヤニヤしてるのかと顔を見れば、意外にも真面目な顔をしてこちらを真っすぐ見つめてきた。商談を決めるときと同じ視線を向けられるとは思わず背が伸びる。

「将来的に見れば下を育てたほうがパフォーマンス上がるだろ」

「確実性が見えないことに博打する余裕がない」

「今のままだとずっとお前に余裕がない」

黒瀬が立ち上がる。ちら、と飲みかけのブラックコーヒーが入ったペットボトルを見て呟いた。

「下に仕事を振り分けるのも、お前の仕事だろうが」

「やってる……」

「まだ足りねえよ」

その声が、思ったより低かった。いつもの軽口じゃない。怒っているというより、本気で困っているみたいな声だった。

じゃあ、お先。いつもの挨拶と共に黒瀬はオフィスから出て行った。

「んだよ、それ……」

痛いところを突かれた。結局俺は自分しか信じてないんだ。見通しが立つ、自分のスキルしか。人を頼って、もし間に合わなかったら？その相手はどう思うんだ。だったら最初から俺だけが責任を負うようにすればいい。

「……帰るか」

今週はずっと頭痛が収まらなかった。まだ薬局開いてるかな、頭痛薬を買い足さないと。

その週末も、結局ほとんど休めなかった。頭痛薬を飲んで、散らかった部屋で資料を直して、月曜には何食わぬ顔で出社する。仕事をするための

休日は、マイナスをゼロにするので精一杯だ。寝つきがどんどん悪くなっている。これも薬に頼ったほうがいいのだろうか。

そんな生活が続いた翌週の水曜日、珍しく黒瀬から会議室に呼び出された。二人で入室して座ったはいいものの、一体何の打ち合わせか分からない。

「会議室、1時間取ってるから」

「何の打ち合わせだよ」

「お前が寝る」

「は？」

開けていたPCを閉じられ、椅子をくっつけて並べられる。いまだに飲み込めない状況にぼかんとしていると、がさりとビニール袋が机に置かれた。

「食え。んで食ったら寝ろ」

「また梅干し」

「お前、これなら食うだろ」

「……食べるけど、さあ」

黒瀬はカタカタとキーボードを叩いて、これかと呟く。

「資料は俺が見る。いいから休んどけ」

「だからって会議室で寝るなんて、バレたらどうすんだよ」

「倒れて救急車呼ばれたいか？ 擦りガラスになってんだから外から見えねえよ」

ほら、と促されて梅おにぎりのフィルムを剥がす。無言で差し出されたティッシュを机にひいて、ぼろぼろと崩れる海苔と一緒に米を頬張った。

酸っぱさですぐに口内が唾液でいっぱいになる。うん、美味しい。やっぱりちゃんとした食事を摂ろう、といつも思うのになぁ。

それから、決して寝心地の良くない椅子で、俺は爆睡していたらしい。

「おい、そろそろ次来るから起きろ」

「んん……寝てた？」

「ぐっすりだったよ」

久しぶりの熟睡に、まだ体が覚醒しきらない。とろとろ微睡みを揺蕩っていると、柔らかく頭を撫でられた。

気持ちいい、もっと。このままもっと、気持ちよく寝たい……。思わず安心できるその手にすり寄れば、すぐに離れて行ってしまった。まって、もっと……。

「おい、ちょっと！」

「あ？……え」

手を伸ばして掴んだのは、黒瀬の右手だったらしい。初めて見る黒瀬の焦った顔が面白くて笑ってしまう。そんな俺を見て、今度は思い切り肩を叩いてきた。

「いって！」

「起きたなら早く出るぞ！ったくほんとに……」

ぶつくさ言っている背中を追うように、荷物をまとめて会議室を出た。寝ぼけていたとはいえ、ちょっと子供っぽかったか……恥ずかしい。熱い顔を手で仰いでいたら、女性社員に心配されてしまった。

そうやって黒瀬に世話を焼かれていた日常に、甘えていたのかもしれない。そんな生活が続いた次の週。頭痛に加えて倦怠感やめまいがするようになっていた。だましだまし出勤していたが、簡易的な栄養摂取では回復が間に合わなかったらしい。

トイレ帰りの廊下で、黒瀬が前から歩いてくる。軽く会釈をして通り過ぎようとしたとき、ぐらりと視界がブレた。床が歪んでそのまま膝から崩れ落ちそうになる。あ、これマズいな。

ぐっと肩が迫って、背中に腕が回された。床に倒れ込むと思ったが、近くで聞こえる声からしてどうやら支えてくれたらしい。

「おい！大丈夫かよ！」

「ああ……悪い、平気だから」

「どこがだ。冗談はその悪い顔色だけにしろ」

俺の言葉をガン無視して、黒瀬はオフィスに入ってすぐ傍にあるソファに座らせてくれた。深く呼吸をしようとしても頭が痛くてそれも辛い。霞む視界でゆらゆらと黒瀬を探せば、カバンを二つ持って戻ってきた。

「ほら、帰るぞ」

「え？いや仕事……」

「そんな状態で何ができるんだよ。お前は病院」

あからさまに嫌な顔をしたんだろう。子どもかよ、と笑われ肩を貸してくれる。でも……。

「黒瀬は？」

「この後外回りの予定だったんだよ。だから、ついでに送る」

「そんな」

「白石の案件は俺も状況把握してるし。今日は白石を帰して、急ぎは俺が拾えて。上司命令な」

それ以上反論することも出来なかった。駐車場まで支えられながら向かい、社用車に乗り込む。ゆっくり車が発進して身体が揺れる。気分悪さを緩和しようと窓の外を見れば、少し窓が開いた。

「吐きそうになったら早めに言えよ。社用車に吐いたら大変だし」

「……分かってる」

「先に病院行くから。外回り終わったらまた迎えに来るから、それまで病院で待っとけよ」

「ん……悪い」

「こういうときは謝罪じゃねーだろ」

視線を運転席へと向ける。それに気づいたのか、黒瀬はどうした？と心配そうに尋ねてきた。ぼんやりした頭で、思ったことをそのまま零す。

「助かる、ありがとう」

「そーそー、それでいいんだよ」

分かりやすい奴、と俺も少しだけ笑って目を閉じた。

それから病院で診察をしてもらえば、睡眠不足と栄養不足、それに軽い脱水。点滴打って帰ってください、と言われ案内されたベッドへ横たわった。ぽたぽたと規則的に落ちる液を見ているうちに、眠気が襲ってくる。社会人になって情けない、と思うのと同時にほっとした自分を見てないふりした。

それから1時間ほど眠った後、薬局へ行って病院に戻ろうとすると、近くでクラクションが鳴る。振り返れば駐車場で手を振る黒瀬。どうやら外回りは終わったらしい。

「お疲れ、外回りどうだった」

「問題なし。っていうか、どうだった？はこっちのセリフだろ。大丈夫だったのかよ」

「過労だって。あと軽い脱水。迷惑かけた」

俺は上手く笑えてなかったらしく、黒瀬の眉間に皺が寄る。家まで送る、とそっけなく運転席へ乗り込む姿に何も言い返せなかった。無言で助手席に乗り、シートベルトを締める。

「ナビ入れて」

「ああ……悪いな」

「もうほとんど仕事終わったからいいよ。謝んな」

地図上に小さく立った旗を見て、黒瀬はアクセルを踏んだ。

自分が思ったより、体力も気力も消費していたらしく、医師から指摘された途端に身体は動かなくなっていた。玄関まで着いていくと言い切る黒瀬を断る気力もなく、アパートの階段を昇ろうとすれば息が上がる。そのまま肩を借りてやっと部屋の前までたどり着いた。

「ほんと、助かった。もう大丈夫だから……」

「飯は？食うもんあるの」

「あー……なんか適当に」

「ふーん？」

居心地が悪くなり、鍵を開ける。

「飯ないんだろ。なんか作るから上がるぞ」

「いや、いいって」

「じゃあ俺が帰ったあと何食うの？」

「……好きにしろ」

荒れ放題の部屋に誰かを招いたことなんて一度もない。阻止しようとしてもずんずん中に入っていく黒瀬に、何を言っても無駄だろう。諦めて自分も部屋に入れば、酷い惨状に恥ずかしい。

「悪い、最近片づけれてなくて」

「そんなのいいから。ほら、お前は寝とけて」

「じゃあお前は帰れよ」

「まあまあまあ」

ジャケットを脱がされ、そのままベッドへ放り込まれる。布団を被せられると、身体は強制的に睡眠を求めてきた。点滴と疲れのせいなのか、思考がどんどん溶けていく。何するつもりだよ、と黒瀬に向けた言葉が届いたのかは分からなかった。

自分の部屋では嗅いだことのない、いい匂いで目が覚める。ゆっくり瞼を持ち上げると、ぼんやりした視界に部屋が映った。あれ、なんか物少ない？ スッキリしてるというか……こんなに床って広がったのか。なんで……？

ハッと起き上がる。あれほど散乱していた服もゴミも何もない。大きく息を吸い込めばこの匂いは。

「おかゆ……？」

「あ、やっと起きたか」

視界に腕まくりをした黒瀬が入ってきた。なにしたんだ、と目で訴えれば、困ったように笑いつつ視線を合わせるようにベッド横へ座る。手のひらで額を包まれ、思わず後ろに反り返った。

「熱は無いか。食欲ある？」

「無くはない……。なあ、散らかってたやつどうした」

「あー、あの栄養食やらチョコレートのだらけのゴミと、エナドリやらコーヒーの缶？一旦袋に詰めてるから後で確認しろ。服もクリーニングに出すっぽいやつはまとめてる」

「悪い……いや、ありがとう」

口から出た癖みたいな謝罪を取り消すと、満足そうに笑ってわしゃわしゃと頭を撫でてくる。おい、俺は犬じゃないんだぞ。そのまま座っとけ、と言われて待っていると湯気の立ったお粥を持って戻ってきた。

「梅干しだ」

「冷蔵庫に米と梅干しか無いの焦るわ」

「何か買っても腐らせるし……」

ローテーブルを移動させて、冷ましながらお粥を頬張る。ちょうどいい塩加減でどんどん手が進んだ。

「お粥ってこんな美味かったっけ」

「俺が作ったからじゃない？」

「かもな」

「……」

「照れるなら最初から言うなよ」

どこか嬉しそうな黒瀬を放って置いて、処方された薬の、夜に飲む分を水で流し込む。食器を片づけようと立ち上がるのを阻止され、風呂へと促された。ご丁寧にタオルの準備までして。

「じゃあ……風呂入るわ」

「ゆっくりしてこい」

しっしつと払うようなジェスチャーをしてくる。世話になってなんだけど、なんだよその扱い。自分の家なのに雑な扱いに首をひねりつつ、服を脱いで浴室へと入る。熱いシャワーを浴びると、少しずつドロドロした罪悪感が剥がれ落ちていく感覚。

本当に黒瀬は仕事が終わっていたのか。俺の残りの仕事はどうなったのか。自分の体調管理も仕事のうちなのに。明日どう巻き返せば間に合うか。そんな考えも、シャワーを浴びて寝てしまえば明日に持ち越せる。そうやって考えたくないことを先送りにした結果が、これなんだけど。

さっぱりして部屋着で戻ると、黒瀬がおにぎりを頬張っていた。

「梅干し苦手じゃなかったっけ？」

「塩むすびだよ。米もらったわ」

「それは全然いいんだけど。もっとちゃんとしたもの食えよ」

「お前に言われたくねー」

はは、と笑う黒瀬は、風呂上がりの俺を見て目を細めた。

「それ、いつも隠してんだ」

「それ？」

「隈」

やべ、と顔を逸らしてももう遅い。忘れていたとはいえ、ずっと隠してたものが見られて言い訳を探す。しかし、何を言っても病院に連れて行ってくれた黒瀬の前では無意味だと分かり、肩を落とした。

「軽く、コンシーラーで」

「その努力できるなら寝ろ」

「最近寝つきが悪くて……って言い訳だな、これも」

自嘲気味に笑って髪をタオルでかき混ぜる。仕事では改善案を考えて当たり前なのに、自分のことになると言い訳ばかりだ。

「そういう意味じゃ……あーもう体調悪くてネガティブなんだよお前！ほら寝ろ！」

「うわっ！？おい病人じゃねーのか俺は！」

ベッドに転がされ軽く言い合いになる。と、はたと黒瀬の口が収まり、不思議そうに首を傾げた。

「てか、寝不足なイメージあるけど寝つき悪いのは知らなかったな」

「寝不足ではあるけど……なんで？」

「だって白石、俺の前では結構寝てるから」

「……そうか？」

「会議室とか、それこそさっきとか。寝付けないって感じではないのかと」

言われてみれば、会議室で無理やり寝かされたときも、さっき帰って来てからもすぐに眠れた。一人だと全然寝れないのに。

「はは、俺がいて安心して寝ちゃうのかよ」

「そう、なのかもな」

「はあ？」

「なあ黒瀬」

寝転んだまま見上げれば、眉を下げて訝し気な顔。こんなこと聞いても、何になるか分からないけど。

「なんでここまでしてくれるの」

知りたいと思ってしまったから。このバカげた推測を崩してほしい。

「……1位を争うライバルだから？」

「ほんとに？」

「じゃあ、お前はなんて言ってほしいんだよ」

目線が合うように、ベッドサイドに座る。お互いに欲しい言葉を引き出させようとしてる、この駆け引きはどちらの得意分野だろう。

「俺は……それだけじゃ説明つかないくらい貰ってる、と思ってる。他の誰かが1位になったら同じことすんの？」

「俺は万年2位だよ。……あー、負けだ負け」

わざとらしく両手を上げてるのに、黒瀬はどこか嬉しそうで。鼻がぶつかりそうなほど、ゆっくり近づいて答え合わせ。

「俺が嫌なんだよ。お前が平気な顔して辛そうなの」

「矛盾してないか、それ」

「だから嫌なの。見てらんねえから」

ふっと唇が触れる。脳みそが理解する前に、濡れた髪が耳にかけられた。

「嫌じゃない？」

「……ん」

「肯定だと捉えるからな、それ」

耳に吹き込まれる声が普段よりくすぐったくて身を振る。遊びみたいなキスが、少しずつ深くなっていく。甘噛みするように唇を吸われて、啄まれて緩く口が開いた。それを見逃さないように、熱い舌が滑り込んでくる。目を閉じてその熱を受け取るのが心地いい。

思わず黒瀬の腕に縋りついた途端、パッと顔が離れた。

「……なんで止めんの」

「病院帰りの奴に何すると思ってんだよ」

布団を被せられ、とんとんと一定のリズムで身体を揺られる。子ども扱いするなよ、と言いたかったが途端に眠気に襲われていった。あのまま進んでいたら……と、安心と少しの物足りなさを見て見ぬふりをして眠りについた。

ふわり、意識が浮上する。しっかり寝られた感じがして、瞼を上げるのがもったいない。……いやまて、今何時？

胸の辺りが冷たくなって、すぐスマホを見る。午前10時。やばい、初めて寝坊した！？飛び起きてメッセージを開けば、そこには黒瀬から1件だけ。上司からの鬼電は無かった。

『白石は病欠で連絡してる。朝飯テーブルの上、昼も抜くな』

どうやら黒瀬は先に起きて出社してるらしい。ローテーブルを見るとおにぎりが2つ。もしや、と冷蔵庫に向かうとそこには見慣れない惣菜が詰

められていた。昨日まで空っぽだったのが嘘みたいで、思わず笑ってしまう。

手に持っていたスマホが震えた。ロック画面にはまた黒瀬のメッセージ。

『今日からガチガチに管理してやる』

「うわ、最悪」

寝起きの声は、自分でも笑っちまうほど楽しそうだった。のは、束の間。

『朝飯食ったら写真送れ』

『昼も抜くな』

『23時までには寝ろ』

母親よりもうるさいメッセージはリマインドのごとく送られてきて、正直とてもめんどくさい。挙句の果てには何かデータを送ってくる始末。

『何だこれ』

『管理表』

『いない』

『異論は聞くけど却下』

管理される側って、こんなに窮屈だったか？顔を顰めてしまうが、言われた通りに動いてしまう自分も自分だ。まあ、あれだけ世話になったし、一日くらい付き合わないと。

そう思っていた管理生活は、淡々と1週間続いてしまった。体調が良くなってからも、朝食の確認から昼休憩のリマインド、帰宅時間の報告やら夜には「もう仕事するな、寝ろ」と言われる。余計なお世話だ、と言いながら従えば、どんどん体調は良くなるのだから困ったものだ。朝鏡を見て塗り重ねるコンシーラーも、だいぶ薄くなってきた。

そんなこんな金曜日。定時に終わらなかった雑用を進めていると、黒瀬が近くにやってきた。最近では帰る前に晩飯を宣言させられる。めんどくさいことこの上ない。

「今日の晩飯は？」

「まだ決めてない」

「えー？じゃあ俺が決めるわ。昨日は野菜炒め買ってたから……」

「もう、惣菜食べきったんだけど」

黒瀬からの返事はない。これ以上こっちから言葉を出せなくて、俺は意味のない数字を表に打ち込んで消していた。ふっと手元に影ができて、見上げると目を細めた黒瀬が覗き込んでくる。

「何その顔」

「いや？じゃあ俺のおすすめ買って帰ろうぜ。何が美味かった？」

「……梅干しおにぎり」

「分かった、米炊いてやるから」

にやにやする黒瀬から逃げるように、PCの電源を落とした。

コンビニで惣菜や朝食のパンなどを買って、二人で俺の部屋へと帰る。特に何もない、世間話や仕事の話をしていれば、時間はすぐに過ぎていった。炊き立ての米で作ったおにぎりは美味しくて、すぐに完食する。

「部屋も片付いてんじゃん。クリーニング出した？」
「お前が行けってうるさいから行った。明日取りに行く」
「頑張ってるな」

そうストレートに褒められてしまうと困る。俺は頷いて、食器をシンクへ持って行った。

「夕飯食べたの見届けたし帰るわ」
「え」
「体調は？問題なし？」
「それは、大丈夫」

じゃあ、と帰ろうとする黒瀬の服を思わず引っ張って引き止める。だっていつもあんなに連絡してくるのに、部屋きたらこんなにあっさりしてるなんて思わなくて。

「どした？白石」
「……この前のあれ、何だったんだよ」

どうにか部屋に留める理由が、それしか見つからなかった。俯く俺の視界に手が現れて、そのまま顎を掬われた。少し高い位置にある黒瀬の顔が近づいて、軽く触れるキスをする。

「嫌なら、今日は帰る」
「……帰るなよ」

俺から一歩踏み出せば、抱き止めるようにして深いキスが降ってきた。

こいつ……キスが上手い！こんなところも器用というか、少し悔しい。こんなところで張り合っても仕方ないけど、いくら抗おうとしても理性が溶けていく。

「キスだけで勃っちゃったんだ？」

「あ……ッ♡急に触んなって」

「ベッド、いくか」

素直に従ってベッドに腰かければ、溶けかけのチョコレートのような腫でまたキスをしてくる。甘ったるいそれは胸やけしそうなのに、気づけば自分から強請っていた。

「お前がずっと頑張ってるの、俺は見てきたから。俺の前くらい頑張んなくていいから」

「ずっとなんっ、あ、くろせ……♡」

キスをしながら下着ごと服を取り払われ、勃起した陰茎が外気に晒される。先走りでテラテラ光るのが恥ずかしくて脚を閉じようとするのを阻まれ、間に黒瀬が滑り込んだ。膝辺りに手をかけられて脚を開かされる。後ろ手を着くと見せつけているようで、はしたない体勢に顔が熱くなった。

「最後に抜いたの、いつ？」

「え、いつだろ……いつもしんどくなったら抜くくらいだし」

思い出せないほど前なことに自分でも驚く。つーっ♡とゆっくり下から上へ、長い指が竿をなぞった。久しぶりの刺激はあまりに甘くて、それだけで腰が浮いた。それを見て楽し気に笑った黒瀬は、先走りを零す尿道口をふにふにと弄ぶ。

「んあっ……♡ちょ、先っば、は……ッ」

「竿扱かれるのと」

「ああっ！は、あ♡」

「先っちょクルクルされんの」

「うっ、んん〜〜〜〜♡」

「どっちが好き？」

じれったい手つきにカクカク腰をくねらせてちんこを押し付けてしまう。もっと、もっと気持ちよくなって、イきたい！出したい！

「あ、竿、扱かれるのが、すき」

「よく言えました。じゃあ、ゆーっくり楽しもうな」

「あーーーー……♡きもち……んあっ、は、ああ♡」

「白石、べーってして」

もう射精のことしか考えられない頭は、聞こえたことを疑問に思わず舌を突き出す。嬉しそうな黒瀬がそれに舌を絡ませて、吸ったり甘噛みしてきてふわふわ気持ちがいい。

竿を扱う手は緩急で俺を翻弄して、ずっとイくかイかないかの瀬戸際を揺蕩っている。あー、もうちょい強くされたら……。うあ、それ気持ちいい。カリ首もっと擦ってほし……。

「えあ、う、んむ……♡は、イきたい、くろせ♡」

「もう？しかたねーなあ」

舌を出しながら喋る俺のをじゅっ♡と吸って顔が離れる。少し強めに握った手が徐々に早くなって、絶頂にどんどん近づいてくる。もうちょっと、あと。

「あ、あ、あ、ああああっ♡イ、く……んんっ♡……あ、え？」

「言ったろ？ゆっくり楽しもうって」

視線を下げると大きな手のひらで根元はぎゅっと握られていて、言葉がやっと理解できるところまで降りてきた。茹った頭はすぐに冷えて、慌ててその手を上から覆う。

「や、やだ……っ！離して黒瀬、っんあ♡」

「だーいじょうぶ、気持ちいいことしかやんねえから」

「なに、ちょっ、うわ！？」

脚を持ち上げられて寝転がる。俺の先走りでドロドロになった右手が離れ、自分でも触らない窄まりに指が宛がわれた。喉が引き攣って、制止する声も届かない。俺のちんこを今度は左手で握って、少し萎えた竿をまた扱き始める。

「そんなとこ、無理だって！んんっ♡」

「マジで辛そうならやめるから。ほら、深呼吸して。ゆっくり、深ーく」

どうなるのか怖くて従ってしまう。怖さと陰茎への刺激で、冷や汗が気持ち悪い。つぶ……♡指が1本侵入してきて息を詰めた。また深呼吸を促されて、異物感と戦いながらゆっくり息を吐く。扱かれながら指がナカで動いて、深呼吸。それが何度か繰り返されたとき。

「ああっ！？♡」

「みーっけ」

「なに、これ♡あ、うう……♡」

「ほら、深呼吸したらもっと気持ちいいよ」

「あ、あう♡すーっ、はーあああっ！♡あ、んん~~~~~♡」

くちくち……っ♡ぐちゅぐちゅぐちゅっ♡

媚びたような声が止まらない。萎えかけていたちんこもまた硬さを取り戻して、情けなくカウパーを垂れ流している。射精感とはまた違う快感は、重たくてじんわり全身に広がっていった。

「白石、自分の握って」

「え？むりそんな……」

「俺の言うこと聞いたら、イイことあるよ」

震える手で根元を握る。イかないように歯を食いしばって、枕に顔を埋めた。少しでも気が緩めばイってしまいそうで、必死に快感を散らす。

「仕事では管理する側ばっかだけどさあ」

「ひっ！？耳……っ！♡」

「たまには管理されんのも悪くねえだろ？」

「あああああ……っ！？♡やだ、それ！舐めんな……あ、やだやだ、イっちゃ♡♡」

れろ〜〜〜っ♡ガサガサ、ざりざり♡

息を吹き込むように囁いて、じっとり耳朶が舐られる。逸らそうとしても頭を固定されて、尖らせた舌先が耳孔に潜り込んできた。

聞き慣れない音と熱い舌が耳を犯す。脳みそに直接響く音と温度に、また頭に靄がかかっていった。力が抜けて、ちんこを握る手も緩んでいく。それを咎めるように、1本指がまた沈められた。

「うあ……っくるし♡は、はあ……っ♡」

「きもちーことだけ考えような。ほら、なーんも考えんな」

「喋るな、あ♡あ、いやっ、そこお！♡は、つら……い♡だめ？イっちゃだめえ？」

「だーめ、もうちょい頑張っ。ねえ白石？俺、お前に勝ちたいけど、潰れて欲しいわけじゃないんだよ」

こりこり♡ぐりぐりぐりい♡

節だった2本の指がしこりを挟むようにして捕まえる。そのまま押し込むように揺らされて、背中にビリビリと刺激が走り抜けていった。これ、ヤバい。なんか違うのがくる……っ！

「だからさ、俺に管理されて、最高の状態で仕事してほしいわけ」

「あ、あ、まって、ちょ、ああんっ！♡それ、ぐりぐり、や……っ♡♡」

「わかった？」

「わかった、わかったからあ！♡あああっ、つよすぎるう……♡♡」

「もうちょいか？ほら、ぎゅって握って」

「う"う~~~~~♡♡んっ、あ、やば♡それすご……あ"ああっあ、あ……っ♡♡」

バチンっ頭がスパークして身体が痙攣して止まらなくなる。意味のない音を唸って初めての絶頂に降りてこれられない。あれ、俺射精したっけ……？

「メスイキできて偉い偉い。素質あるよ白石♡」

「おあ……っ、あ、まって……♡う、ああ……っ」

「3本入れば楽だから」

「な、にが……あああっ、う、んんっ♡は、あ"~~~~~♡」

一度知った快感を追い求めるように、更に拵げられた肉壁は黒瀬の指に絡みつく。射精してないからか下腹部にぐるぐると熱は滞留していて、前も後ろもトドメを待っていた。

ずる、と指が引き抜かれる。ぽっかり空いた穴がヒクヒク収縮して恥ずかしい。いや、もうここまで見られたら恥ずかしいも何もないか。

ぼんやりしていれば、ひたりと熱いものが宛がわれた。思わず胸を押し返せば、溶けたチョコレートは甘く俺を映す。

「ほんとに嫌ならやめるけど、どうする？」

「あ……っ、やだ、やめない、で」

ちゅふ♡にゅぐ~~~~~っ♡♡

「あ、まって、あ、あっ、ん"ん~~~~~っ♡♡ふか、あ"、あつ♡お"、お"あ、やあ……でか、い♡」

「あんま煽んなってば。ほらココ、さっき気持ちよかったとこ。わかる？」

「あ"あんっ！？♡♡わかる、わかるから！や、ごしごし、しないでえ♡やば、あ"、う"う♡」

指とは比べ物にならない質量が腹に埋め込まれる。熱い固まりが抜き差しされて、カリが容赦なくナカを抉っていった。全身に鳥肌が立って、暑いのか寒いのか分からないほど震える。腰を掴んでいた手がゆったり腹を撫でてきた。

「白石のナカ、熱くてキツくて気持ちいい」

「はっ……うあ……♡きもち……い」

「ちゃんと言われるまでちんこ握ってて偉いな」

ぎゅっと握りしめていた指を一本ずつ剥がされていく。血管が浮き出た陰茎はふると揺れて、はしたなく先走りで濡れていた。真っ赤になってうっ血したようなそれを、黒瀬の指がまたつーっとなぞっていく。

鼓動がうるさすぎて頭まで響く錯覚に陥った。浅い呼吸がどんどん身体に力が入っていく。きゅう♡とナカを締めつけて、勝手に刺激を拾った。

「我慢できたからさ、ご褒美♡」

「や、やだ……っ！あ、なに、んんっ♡んあ……」

ちゅっちゅく♡ばちゅばちゅばちゅ♡

喰われるようなキスが、嬌声を飲み込んでいく。再開されたストロークは徐々に早く、奥まで届いて重たい快感を溜めこませる。俺のちんこは根元を軽く握られて、時折黒瀬の腹筋に亀頭を擦り付けていた。

出したい、黒瀬のおっきい手でゴシゴシしてくれたら、すぐにイけるのに♡ナカも気持ちいいけど、ちんこで射精したい！♡

俺は必死に腰を突き上げて、ちんこを擦り付けようとする。そんな姿を楽し気に見ながら、黒瀬は前立腺を押し込んできた。自らナカのイイところを当ててみたいで、もう自分がどうしたいのか分からず腰を振る。

「や、くおせ……っああ♡だしたい、ね、イかせて、あ"、んんっ♡ナカじゃ、イけないい……からあ♡は、はあっ、あ"あああっ♡」

「んー？もーちょい頑張れる？白石ならできるよ」

「う"あっ！♡や、も、できないiiiiii！♡♡ちんこいたいの、ねえ♡おねが、んおっ、あ、そこだめだめだめ……っ♡んんんんん♡また、キちゃう！なんか、やだこれえ♡お、お、お"おっ！あ"あ"ああ~~~~~♡」

がくがくがくっ！♡きゅ〜〜〜〜♡

高いところから降りてこれられない、あの快感が全身を包む。気持ちよすぎて怖い。腹に何もかかっていないってことは、まだ射精してない。このままずっと出せない？ずっとこの気持ちいいのを受け続ける？早く、逃げないと。

力の入らない足でシーツを蹴ると、黒瀬の両手が俺の腰を掴んだ。あ、もうこれダメだ。

パンパンパンパンッ！♡がちゅがちゅがちゅっ！♡

身体が揺さぶられるのと同じように、ちんぽはぶるんぶるん♡揺れて、それだけでもう十分だった。

「あっあっあっあっ！♡まってまってまってえ！！♡や、まだイってる、イ……っ！♡♡あ"、おおっ、お、お"、お"、お"お〜〜〜〜♡や、おかしくなっちゃ♡♡も、とまれ、とまえ♡♡は、はあっ！」

「連続でメスイキしちゃった？かわい、いっぱい気持ちよくなれたな♡ほら、覚えてないくらいずーっと溜め込んでた精子、思いっきり出していいぞ？」

「ひっ、やだっさわるな！♡♡いっしょはむり！あ"あ"あああああああああ！♡♡ん"んっあ、やあ♡♡むりむりむり！まで、おおっお、あ"あんっ♡や、は、でちゃ、あ、ああ、う"あ〜〜〜〜〜〜♡っあ、あ"あっ……♡♡♡」

びゅくっ♡とぷとぷとぷ……♡

ずっと堰き止められていた白濁は、勢いよく飛び出したかと思えば後からトロトロと零れ落ちた。ず〜っと射精している感覚に視界がブラックアウトする。初めての行き過ぎた快楽に、意識がぶっ飛びそうだ。

「ははっ、マジでめっちゃ濃いな。どろっどろ……きもちいい？」

「あ"……ん、ぎもち……♡♡」

「俺も白石のナカ、出している……っ？」

「ん、だして♡ほしい……んあっ♡あつ……♡」

びゅる~~~~~♡

腕を伸ばした俺を引き寄せて、ぎゅっと抱き締められながら中に出された。腹の中がじんわり熱くなって、黒瀬の精子が広がるのを感じる。何度か塗り広げるようにされ、熱望が引き抜かれてまた声が漏れた。

ぽっかり空いた穴からドロリと白濁が尻を汚す。ぐちゃぐちゃの自分を気にする余裕も無くて、シーツにしがみ付いて快感を享受した。

狭いシングルベッドの横に、黒瀬が横たわる。なんとか動く目だけを向ければ、まだ胸やけしそうな瞳でこちらを微笑んでいる。顔にかかった髪を耳にかけてくれて、そのまま額に唇を落とした。

「頑張ってくれてありがとな。後は俺がやっとくから、寝ていいぞ」

えらい、えらいと髪を梳くように頭を撫でられて、落ちていく意識の中で手を伸ばした。

「なあ、黒瀬」

「ん？」

「……今日、帰んの？」

「帰ってほしい？」

「……別に」

「はいはい。いるよ」

その言葉を聞いて、俺はそのまま眠りについた。